



# この先どうなる 北海道のローカル線

留萌本線、留萌・増毛間廃止

少し古い話で恐縮ですが、増毛へ行ってきました。留萌本線・留萌―増毛間の最後を見届けるためです。

最終運行日は2016年12月4日でしたが、私は11月29日の夜行バスで札幌へ行き、30日の札幌発一番列車で深川を経由して留萌、増毛へ。増毛で1泊し、函館へ戻りました。

## 鉄道の旅の王国だった北海道

私と北海道の接点は学生時代の鉄道の旅でした。40年も前になりましたが、北海道の海岸線のほぼすべてに民営化前の国鉄が走り、内陸部も今よりずっと多くの町を鐵路が結んでいました。飛行機は高嶺の花だった当時、北海道入りは青函連絡船が当たり前でした。函館は「ここを通らなければ北海道のどこにも行けない」という関所のような町でした。

当時、関西の学生の間では、北海道までの往復に、道内の国鉄と国鉄バスの乗り放題が付いて、値段は往復の運賃程度という「北海道ワイド周遊券」を買って、有効期間の20日間、目杯、北海道を回るといふ旅がブームになっていました。

私もそのお手持チケットで北海道を満喫しました。今も「函館を振り出しに鐵路がつなぐ北海道」という楽しい記憶がこびりついています。それだけに今の道内の鐵路路線図を見ると淋しくなりますし、函館在住で直接関係ないとはいえ、留萌―増毛の廃線を知り、居ても立ってもいられなくなったというわけです。

## 意外だった現地の様子

増毛の宿を予約したのは前日でした。鉄道ファンでどこも満室だろうと思っていたのに、最初に電話した宿がすんなり取れました。肝心の鉄道はさすがに混んでいました。留萌発増毛行き列車は、増結車両のデッキにまで人が溢れていました。

午後0時47分に増毛着。駅構内は列車から吐き出された人々が撮影に興じ、高倉健主演の映画「駅」のロケに使われた駅前風待食堂も押すな押すなの人ばかりでした。

ところが午後3時41分発の留萌方面行き列車が出ていくと、駅周辺から人の姿はほとんど消えてしまいました。宿が楽に取れたはずですが、宿に着き、おかみさんに廃線について尋ねたところ、「ほとんど車だし、通学もバスの方が学校の近くまで行ってくれるので便利です。乗客といえばお年寄りくらい。各列車に、ほんの数名じゃないですか」という答えが返ってきました。

夜、飲み屋のカウンターで居合わせた60歳前後の地元の人も、「乗り継いで札幌やどこか遠くまで行くときはJRの方が便利だけれど、普段はバスか車」と言っていました。さすがに商工会の職員さんは、「今まであったものがなくなる。その精神的な空白感、計り知れない」と言っていましたし、増毛の酒蔵・国稀酒造の近くですと食堂を営んでいる初老の婦人は、「それはもう淋しくなる」とのことでした。

## 鉄道が消えて本当によいのか

しかし結局のところ、廃線を惜しんでいるのは、公的な職業にある人やお年寄り、そして私のような旅行者だけということなのでしょう。いや、もし北海道の鉄道も首都圏

のように便利なら、廃線は見越せてないはず。利用者が減り、本数が減る中で、「仕方がない」と思わざるを得ない状況に追い込まれただけかもしれない。そんな中、最後に頼りになるのは車。でも今、お年寄りによる交通事故が急増しています。今の世の中、すべてが採算第二で、旧国鉄にしても何にしても「官がダメなら民へ」という方向に進んできました。でも民がダメなら、この先どうなるのでしょうか。



ラストランの見学者で混雑した増毛駅

★プロフィール★

おおにし つよし  
**大西 剛**さん

1959年生まれ、大阪出身。  
2011年秋より函館に移住し、「新函館ライブラリ」を設立。「市電でめぐる函館100選」など函館本の出版に取り組む。宮沢賢治生誕120年にあたる2016年には、函館在住の版画家・佐藤国男氏と函館・道南のナレーターによる賢治童話のミニ絵本付き朗読CDシリーズを発行。